ROMCO
普及版
吉川英治代表作品
悠久の大自然と治乱興亡果てない大陸の歴史が育くんだ複雑な中国の人と心。魏蜀呉三国の覇権と政治の妙に学ぶ生甲斐と身の処し方。改めて日中文化の関連と我が人生とはとを考える自戒の書。
吉川英治
三国志
(二)

吉川英治

三国志

第二巻　群星の巻

三国志　2巻（全10巻）　0093-00210-9216

昭和31年7月20日　初　版　発　行
昭和54年1月20日　新装第9版発行
著　者　吉　川　英　治
発行者　賀　來　壽　一
発行所　株式会社 六興出版
東京都文京区水道2－9－2　〒112
電話東京(943)3431 振替東京 1-92448

印　刷　図書印刷株式会社
製　本　株式会社　明　泉　堂
落丁本，乱丁本はお取替えいたします

© 1975 Fumiko Yoshikawa, Printed in Japan
定価はカバーに明記してあります。

目

次

偽忠狼心……三
競う南風……一四
江東の虎……二五
関羽一杯の酒……三一
虎牢関……四四
洛陽落日賦……五五
生死一川……七〇
珠……七九
白馬將軍……九〇
溯江……一〇三

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

石……一一七
牡丹亭……一二三
傾国……一三一
痴蝶鏡……一四三
絶桜の会……一五一
天颱……一六三
人間燈……一七一
大権転々……一八五
秋雨の頃……一九四
死活往来……二〇三

牛と『いなご』……二二三
愚兄と賢弟……二三六
毒と毒……二四六

群星の巻

偽忠狼心

一

曹操を搦めよ。

布令は、州郡諸地方へ飛んだ。

その迅速を競って。

一方——

洛陽の都をあとに、黄馬に鞭をつづけ、日夜をわかたず、南へ南へと風のごとく逃げて来た曹操は、早くも中牟県（河南省中牟・開封—鄭州の中間）——の附近までかかっていた。

「待てっ」

「馬を降りろ」

関門へかかるや否、彼は関門の守備兵に引きずり降ろされた。

「先に中央から、曹操という者を見かけ次第召し捕れと、指令があった。その方の風采と、容貌とは人相書にはなはだ似ておる」

関の吏事は、そう言って曹操が何と言いのがれようとしても、耳を貸さなかった。

「とにかく、役所へ引ッ立てろ」

兵は鉄桶のごとく、曹操を取り囲んで、吟味所へ拉してしまった。

関門兵の隊長、道尉陳宮は、部下が引っ立てて来る者を見ると、

「あっ、曹操だ！　吟味にも及ばん」と、一見して言い断った。

そして部下の兵を犒って彼が言うには、

「自分は先年まで、洛陽に吏事をしておったから、曹操の顔も見覚えている。——幸いにも生擒ったこの者を都へ差し立てれば、自分は万戸侯という大身に出世しよう。お前たちにも恩賞を頒かってくれるぞ。前祝

いに、今夜は大いに飲め」

そこで、曹操の身はたちまち、かねて備えてある鉄の檻車に拋りこまれ、明日にも洛陽へ護送して行くばかりとなし、守備の兵や吏事たちは、大いに酒を飲んで祝った。

日暮れになると、酒宴もやみ、吏事も兵も関門を閉じてどこへか散ってしまった。曹操はもはや、観念の眼を閉じているもののように、檻車の中に倚りかかって、真暗な山谷の声や夜空の風を黙然と聴いていた。

すると、夜半に近いころ、

「曹操、曹操」

だれか、檻車に近づいて来て、低声に呼ぶ者があった。

眼をひらいて見ると、昼間、自分を一目で観破った関門兵の隊長なので、曹操は、

「何用か」

嘯くごとく答えると、

「おん身は都に在って、董相国にも愛され、重く用いられていたと聞いていたが、何故に、こんな羽目になったのか」

「くだらぬ事を問うもの哉。燕雀なんぞ鴻鵠の志を知らんやだ。——貴様はもうおれの身を生擒っているんじゃないか。四の五の言わずと都へ護送して、早く恩賞にあずかれ」

「曹操。君は人を観る明がないな。好漢惜しむらく——という所か——」

「なんだと」

「怒り給うな。君がいたずらに人を軽んじるから一言酬いたのだ。かくいう自分とても、冲天の大志を抱いておる者だが、真に、国の憂いを語る同志もないため、空しく光陰の過ぎるのを恨みとしておる。折から、君を見たので、その志を叩きに来たわけだが」

意味ありげな言葉に、曹操も初めの態度を改めて、

「しからば言おう」と、檻車の中に坐り直した。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

二

曹操は、口を開いた。

「なるほど董卓は、貴公の言われたようにこの曹操を愛していたに違いない。――しかしそれがしは、遠く相国曹参が末孫にて、四百年来、漢室の禄をいただいて来た。なんで成り上がり者の暴賊董卓ごときに、身を屈すべきや」

と語気、熱をおびて来て――

「如かず国のため、賊を刺し殺して、祖先の恩を報ずべしと、董卓の命を狙ったが、天運いまだ我に非ずして捕われの身となってしまった。なんぞ今――こうしてさら、悔いる事があろうか」

白面細眼、自若としてそう言う容子、さすがに名門の血すじをひいているだけに、争い難い落着きがあった。

「……」

黙然――ややしばらくの間、檻車の外にあってその態を見ていた関門兵の隊長は、

「お待ちなさい」

言うかと思うと、檻車の鉄錠を外して、扉を開き、驚く彼を中から引き出して、

「曹操どの。あなたはどこへ行こうとしてこの関門へかかったのですか」

「故郷――」

曹操は、茫とした面持ちで、隊長の行為を怪しみながら答えた。

「故郷の譙郡に帰って、諸国の英雄に呼びかけ、義兵を挙げて再び洛陽へ攻め上り、堂々、天下の賊を討つ考えであったのだ」

「さもこそ」

隊長は、彼の手を曳いて、密かに自分の室へ請じ、酒食を供して、曹操のすがたを再拝した。

「思うに違わず、御辺は私の求めていた忠義の士であ

った。あなたに会ったことは実に喜ばしい」
「でも御身も董卓に恨みのある者か」
「いや、いや、私怨ではありません。大きな公憤です。義憤です。万民の呪いと共に憂国の怒りをもって、彼を憎み止まぬ一人です」
「それは、意外だ」
「今夜かぎり、てまえも官を棄てて此関から奔ります。共に力を協せて、あなたの赴く所まで落ちのび、天下の義兵を呼び集めましょう」
「えっ、真実ですか」
「なんで嘘を。——すでにこう言う前に、あなたの繩目を解いているではありませんか」
「ああ！」
曹操は初めて、回生の大きな歓喜を、その吐息にも、満面にも現わして、
「して、貴公は一体、何とおっしゃる御仁か」と、訊ねた。
「申しおくれました。自分は、陳宮字を公台という者です」
「御家族は」
「この近くの東郡に住まっています。すぐそこへ参って、身支度を代え、すぐさま先へ急ぎましょう」
陳宮は、馬を曳き出して、先に立った。
夜もまだ明けないうちに、二人はまた、その東郡をも後にすてて、ひた急ぎに、落ちて行った。
それから三日目——
日夜わかたず駆け通して来た二人は、成皐（河南省・衛輝附近）のあたりを彷徨っていた。
「今日も暮れましたなあ」
「もうこの辺まで来れば大丈夫だ。……だが、今日の夕陽は、いやに黄いろっぽいじゃないか」
「また、蒙古風ですよ」
「あ、胡北の沙風か」
「どこへ宿りましょう」

「部落が見えるが、この辺はなんという所だろう」
「先程の山道に、成皐路という道標が見えましたが」
「あ。それなら今夜は、訪ねて行くよい家があるよ」
と、曹操は明るい眉をして、馬上から行く手の林を指さした。

三

「ほ、こんな辺鄙の地に、どういうお知り合いがいるのですか」
「父の友人だよ。呂伯奢という者で、父とは兄弟のような交わりのあった人だ」
「それは好都合ですな」
「今夜はそこを訪れて一宿を頼もう」
語りながら、曹操と陳宮の二人は、林の中へ駒を乗り入れ、やがてその駒を樹に繋いで、尋ね当てた呂伯奢の門をたたいた。
主の呂伯奢は驚いて、不意の客を迎え入れ、
「だれかと思ったら、曹家の御子息じゃないか」
「曹操です。どうもしばらくでした」
「まあ、お入りなさい。どうしたのですか。一体」
「何がです」
「朝廷から各地へ、あなたの人相書が廻っていますが」
「ああその事ですか。実は、丞相董卓を討ち損じて逃げて来たまでの事です。私を賊と呼んで人相書など廻しているらしいが、きゃつこそ大逆の暴賊です。遅かれ早かれ、天下は大乱となりましょう。曹操も、もうじっとしてはいられません」
「お連れになっている人はどなたですか」
「そうそう、御紹介するのを忘れていた。これは道尉陳宮という者で、中牟県の関門を守備しており、私を曹操と見破って召し捕らえたくらいな英傑ですが、胸中の大志を語り合ってみたところ、時勢に鬱勃たる同憂の士だということがわかったので、陳宮は官を捨て、

私は檻を破って、共にこれまで携え合って逃げ走って来たというわけです」
「ああそうですか」
呂伯奢は、跪いて、改めて曹操のすがたを拝し、
「義人。――どうかこの曹操を扶けて上げてください。もしあなたが見捨てたら曹操の一家一門はことごとく滅んでしまうほかはありません」
と、曹操の父の友人というだけに、先輩らしく慇懃に将来を頼むのであった。
そして呂伯奢は、いそいそと、
「まあ、御ゆるりなさい、てまえは隣村まで行って、酒を買って来ますから」
と、驢に乗って出て行った。
曹操と陳宮は、旅装を解いて、一室で休息していたが、主はなかなか帰って来ない。
そのうちに、夜も初更のころ、どこかで異様な物音がする。耳をすましていると、刀でも磨ぐような鈍い響きが、壁を越えて来るのだった。
「はてな?」
曹操は、疑いの目を光らし、扉を排して、また耳を欹てていたが、
「そうだ、……やはり刀を磨ぐ音だ。さては、主の呂伯奢は、隣村へ酒を買いに行くなどと言って出て行ったが、県吏に密訴して、おれ達を縛らせ、朝廷の恩賞にあずかろうという気かも知れん」
呟いていると、暗い厨の方で四、五名の男女の者が口々に――縛れとか、殺せとか――言い交わしているのが、曹操の耳へ、明らかに聞こえて来た。
「さてこそ、われわれを、一室に閉じこめて、危害を加えんとする計にうたがいなし。――その分なれば、こっちから斬ってかかれ」
と、陳宮へも、事の急を告げて、にわかにそこを飛び出し、驚く家族や召使い八名までを、またたく間にみな殺しに斬ってしまった。

そして、曹操が先に、
「いざ逃げん」と、促すと、どこかでまだ、異様な呻き声をあげて、ばたばた騒ぐものがある。
厨の外へ出て見ると、生きている猪が、脚を木に吊されて、啼いているのだった。
「ア、しまった！」
陳宮ははなはだ後悔した。
この家の家族たちは、猪を求めて来て、それを料理しようとしていたのだ――と、わかったからである。

四

曹操は、もう闇へ向かって、急ごうとしていた。
「陳宮。はやく来い」
「はっ」
「何をぐずぐずしているのだ」
「でも……。どうも、気持が悪くてなりません、慚愧にたえません」
「なんで」
「無意味な殺生をしたじゃありませんか。かわいそうに、八人の家族は、われわれの旅情をなぐさめるために、わざわざ猪を求めて来て、もてなそうとしていたんです」
「そんな事を悔いて、家の中へ、掌を合わせていたのか」
「せめて、念仏でも申して、科なき人たちを殺した罪を、詫びて行こうと思いまして」
「ははは。武人に似合わんことだ。してしまったものは是非もない。戦場に立てば何千何万の生霊を、一日で葬ることさえあるじゃないか。また、我が身だって、いつそうされるか知れないのだ」
曹操には、曹操の人世観があり、陳宮にはまた、陳宮の道徳観がある。
それは違うものであった。
けれど今は、一蓮託生の道づれである。議論してい

られない。

二人は、闇へ馳けた。

そして、林の中に繋いでおいた駒を解き、飛び乗るが早いか、二里あまりも逃げのびて来た。

——と、かなたから、驢に二箇の酒瓶を結びつけて来る者があった。近づき合うにつれて、ぷーんと芳熟した果物の佳い匂いが感じられた。腕には、果物の籠も掛けているのだった。

「おや、お客人ではないか」

それは今、隣村から帰って来た呂伯奢であったのである。

曹操は、まずい所で会ったと思ったが、あわてて、

「やあ、御主人か。実は、きょうの昼間、これへ来る途中で寄った茶店に、大事な品を忘れたので、急に思い出して、これから取りに行くところです」

「それなら、家の召使いをやればよいに」

「いやいや、馬で一鞭当てれば、造作もありませんから」

「では、お早く行っておいでなさい。家の者に、猪を屠って、料理しておくように言っておきましたし、酒もすてきな美酒をさがして、手に入れて来ましたからね」

「は、は、すぐ戻って来ます」

曹操は、返辞もそこそこ、馬に鞭打って呂伯奢と別れた。

そして四、五町ほど来たが、急に馬を止め、

「君！」と、陳宮を呼び止め、

「君はしばらくここで待っていてくれないか」

と言い残し、何思ったか、再び道を引っ返して馳けて行った。

「どこへ行ったのだろう？」と、陳宮は、彼の心を解きかねて、怪しみながら待っていたところ、やがての事曹操はまた戻って来て、いかにも心残りを除いて来たように、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo